

中等部第 1 回

国語

平成31年 2 月 1 日実施

50 分

2019年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕〔二〕があります。
 - 二、解答時間は五十分です。
 - 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
 - 四、問題は解答用紙の所定のところに書いて
ください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を
記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校六年生の田中花実^{たなかはなみ}は母と二人で元気に生活している。ある日、母にスーパーカザマを経営^{かつか}している風間さんとの再婚話^{さいこんわ}を持ち上がる。お見合いに同席した花実は、風間さんにより印象をいだいた。

奇妙な夢を見たけれど、どこどなく弾む気持ちは起きてからも続いていた。しかしそれはその日の午後、あっけなく打ち砕かれた。

いつものようにプールから帰り、横になってテレビを見ていると、手足がだるくなってきて、眠ってしまったようだ。それでもなんとなく、気配でお母さんが帰ってきて、テレビを消し、タオルケットをかけてくれたのがわかった。うとうととしていると、お母さんが台所仕事をする音が聞こえてくる。そこへ、「ちよいと、いじめんなさいよ」「おばさんの声がした。」

「昨日はありがとございました。いよいよお世話になりましたよ」といって

「ああ、ああ、そのことなだけじゃ」

おばさんが、いつになく沈んだ声のトーンで言った。ドキンとした。よくない予感で全身の血が波打ち出す。体を硬くして眠ったふりを続ける。

「午後、風間さんから電話がかかってきてね。まあ、その、今回の話は、その、なんていうか、まあ、い縁がなかったことかな」

「ああ、要するに断られたってことね。そうか、そうか。まあ、しゃーないな」

お母さんは別段、いよいよとこころまなごひひな言ひで答えた。

「ごめんね、ごめんね。」
 「おばさんが謝る（あやま）るじやないです。」
 「でもさ、でもさ、あたしゃいけると思っただけどねえ。最初話を持っていった時も向（む）こうはずいぶん乗り気で、実際会っ
 てみても、会話も弾んだし、傍（はた）から見てもいい雰囲気（ふんいき）だったんだけどねえ。一体どうしたことなんだか」
 「風間さんもいろいろ考えるところがあったんでしょ。こればかりは仕方がないよ。向（む）こうが、いやって言ったな」
 「いやいや、あなた自身（みづか）がどうのってことじゃないらっしゃいな。だって昨日の時点（しんてん）では、すくいい人を紹介（しょうかい）してく
 れた（あ）ってヨロコんでいたんだから。やっぱり、あれかねえ」
 おばさんが声を潜（ひそ）めた。
 「子供、花ちゃんだよ」
 「えっ、花？」
 「うん、やっぱり子供のことがねえ、あったんじゃないかと思っただよねえ」
 「そんな。花がいることは最初からわかってたことなんじゃ？」
 「そりゃあ会う前は、子供がいることは全くかまわないなんて言うていたけど、確かにそれは嘘（うそ）じゃなかったらうけど、
 いざ実際目の前にしてみると、怖（おそ）気（き）ついたというか、覚悟（かくご）ができていなかったというか。いきなり十二歳（じふにさい）の女の子の父
 親（ちち）って現実（げんじつ）が重（おも）くのしかかってきたのかもしれないね」
 心臓（しんざう）の血管（けっかん）が破裂（はくはつ）しそうなくらいにドクンとした。
 「そんなふうに思っつのなら、こっちからお断（つ）りですよ。まあ、いいですよ、もう。最初（さいしょ）からそんな期待（きたい）してなかったし」
 「どうだね」
 おばさんはまだ何か言（い）いたそうだったが、「本当に悪（わる）かったね。ごめんね」と何遍（なんべん）も謝（あやま）って帰（かえ）っていった。

自然と体（てい）に力（ちから）が入（い）っていた。お母（おと）さんはお見合（みあ）いを断（つ）られた。どうやらそれは私が理由（りゆう）であるらしい。どうしよう。ど
 うしよう。どうしよう。

バチが当たったかな、と思った。浮（う）かれていい気（き）になって、ヨク深（こ）い夢（ゆめ）を見た。調子（ていし）に乗（の）って [A] 浮かび上が
 るうとしたら、いきなり神様（かみさま）に [B]、厚底（あつぞこ）のスリッパでたたかれて、また海中（ちゆうちゆう）深く沈（しず）められた感じ。

「神様（かみさま）ってのは案外（あんがい）地悪（ぢあく）ですよ。」このことは頭の隅（すみ）にとどめておいたほうがいい。人の小さな願い（ねが）いも、ささやかな祈（いの）りも、
 時に神様（かみさま）は、容赦（ようじや）なくたたき潰（つぶ）します。いい結果（けつこ）と悪い結果（くわいけつこ）がある時（とき）、悪いほうへ転（ま）ぶことのほうが断然（だんぜん）多い。心臓（しんざう）がえ
 ぐられるような苦痛（くるしみ）を与（あた）えて、それを神様（かみさま）は、ほくそ笑（わら）んで見（み）ているんです」
 理科（りか）の授業（じゆぎょう）だったのに、なんの脈絡（みやくらく）もなく、唐突（たうとつ）に木戸（きと）先生（せんせい）がそんなことを言い出したことがあった。一体（いつ）木戸（きと）先生（せんせい）
 に何（なに）があったのかわからないが、この発言（はつげん）はクラスのみんなを大（お）いに戸惑（とまど）わせた。もっとも先生（せんせい）は時々（ときどき）こういうことをす
 るのだ。先生（せんせい）の変人（へんじん）ぶりは浸透（しんとう）していたから、またか、という雰囲気（ふんいき）でもあったのだが。

「こういうことなんだね、先生（せんせい）。さすがに先生（せんせい）だけあって、真理（まこと）をついたことを言う。でもその後（のち）どうしたらいいかまで
 は教えてくれなかった。

どおりあえず今（いま）私がすべきなのは、寝（ね）たふりをもつ少し続けて、さっきの話（わたり）は全く聞（き）いていなかったという体（てい）にすること
 だ。

と、夕飯（ゆふめし）の支度（しど）をしていたお母（おと）さんが振り返（かえ）り、「もうすぐご飯（めし）だよ」といつもと全く変わらない様子（ようす）で言った。

夕飯（ゆふめし）は、近所（きんじよ）のお肉屋（おにくや）さんのコロッケともやしの味噌汁（みそしゆ）だった。そのコロッケは我が家（わがや）の定番（ていぱん）メニューで、潰（つぶ）したジャ
 ガイモの中にほんの少し（ちひ）ひき肉（ひきにく）が混ぜ（ま）ぜ込んである。お母（おと）さんは、「野菜（やさい）とお肉（おにく）がいつ（いつ）べんに取（と）れていい」などと言（い）うが、そ
 うではこのコロッケが一番（いちばん）安い（やす）いのだ。メニューは倍（ばい）すめ。

昨日、お見合いの時の食事代は風間さんが払ってくれたようだが、あのコース一人分で、このコロッケがいくつ買えるだろうかなどと、詮無(せんむ)いことを考えてみる。

お母さんがもやし味の味噌汁をすすりながら、「もやしって、えらいよなあ」と言っ
「ななごご」

「だってこれひと袋(ひやく)十九円だよ。こんなにいっぱい入ってて、ビタミンCや食物繊維(じよくせんじ)もあって、それで十九円って。今どき十九円で買えるものなんてそうないよ。十九円やるから、作ってみろって言われてもできないよ。袋代(ふく)だってあるだろつに。ホント、えらいよ、もやしって」と感慨(かんがい)深(ふか)げに言っが、それを言っなら、もやしを栽培(さいばい)している人がえらいのだろつと思ったが、うなずいておいた。

お母さんはいつも通り、「このおかずでどんぶり飯(い)を二杯(に)平(ひら)らげ(最後はご飯に味噌汁をぶっかけた)、お笑い番組(ばんぐみ)を見て大笑(おほは)いしていた。

「ごめんね、お母さん。

もし風間さんと結婚(けっこん)できたら、「コロッケともやしはっかり食べているような生活(せいかつ)しなくてよかったのに。もし私(わたし)がいなければ、お母さん一人(ひとり)だったなら。

私(わたし)、どつしたらいい？ どつしたらいい？

次の日、プールには行かず、自転車を走らせ、風間さんのお店に行っみた。私(わたし)が行っみたところ(ところ)でどつにかなるものではないとわかっていたけれど、行かずにはいられなかった。お店に風間さん(かま)がいるとも限(かぎ)らないし、会(あ)えない確率(かくりつ)のほつが高いような気がしたけど(実際(じっさい)前に来た時は会(あ)えなかった)、ほかに方法(はうほう)が思(おも)いつ(つ)かなかつた。

店内(たんでん)に入ると冷気(れいき)が汗(あせ)ばんだ体を一(いち)気に冷(ひや)やす。見渡(みわた)してもやはり風間さん(かま)の姿(すがた)はない。

しばらく店内(たんでん)をぶらぶらして雑誌(ざっし)を立ち読(よ)みしたりしてしたが、風間さん(かま)は現(あら)われない。あきらめて帰(かえ)ろつとした時(とき)、「花

実(ま)ちゃん？」と声(こゑ)がした。振り向(む)くと、風間さん(かま)が立(た)っていた。

「あ、すいません」

思(おも)わず謝(あやま)っていた。

「どつしたの？ わざわざ来てくれたの？」

「あ、いや、その、あの、ちよつと」

言(い)いよどむ私(わたし)を見て、

「ちよつと奥行(おく)じつか？」

と、『関係者(かんけいしゃ)以外(いがい)の方はご遠慮(えんりょ)ください』と書(か)かれた鉄(てつ)の扉(かど)に手(て)をかけた。両端(りょうたん)に段ボール箱(ダンボール)がいっぱい積(た)んである通路(どうろ)を抜(ぬ)けると、奥(おく)に事務所(じむしょ)みたいな部屋(へや)があつた。事務机(じむぐゐ)とソファ(ソファ)セットがあつて、そこを勧(すす)められた。

「外(ぐわい)は暑(あつ)かつたでしょ。オレんじジュースでいい？」

「あ、はい」小声(こゝろ)で答(こた)えると、部屋(へや)の隅(すみ)にある小型(せうがた)の冷蔵庫(れいぞうこ)からパックのジュースを出(だ)してくれた。のどがからからだったので、C 飲(の)むと少し落(お)ち着(き)いた。冷(ひや)えていて美味(あじ)しかった。風間さん(かま)も向(む)かいに座(ま)る。

「自転車(じてん)で来たの？」

「あ、は」

「一番暑(いちばんあつ)い時間(じかん)だから大変(たいへん)だったでしょ」

「は」

言(い)わなきゃ、言(い)わなきゃ。一(いち)気に言(い)わなきゃ。

「あの、私(わたし)、いなくなりますから。どつか行(い)きますから。それでもダメですか？ お母さん(おはは)のこと」

風間さん(かま)はD した顔(かほ)で私(わたし)を見た。明らかに私(わたし)の言(い)ったこと(こと)の意味(いみ)が理(り)解(かい)できない顔(かほ)をしてる。

「えっ？ あっ、お母さんのこと？ ああ、お話を断りしたこと。」

「はい、そうです。だからもし私のことが原因なら、私どこか行きますから。今すぐには無理かもしれないけど、絶対必ずそうしますから、それでもダメですか？」

「一気に吐き出した。まっすぐ風間さんを見ると、風間さんの目も大きく見開かれてこっちを見ている。」

「いやあ、まいったなあ。そんなふうに思わせちゃったかあ。本当に申し訳ないな。でも全然違つよ。花実ちゃんがどうのこのついでにじゃないんだ」

「じゃ、じゃあお母さんですか？ もしお母さんに悪いところがあつて、まあ結構あるかもしれないですけど、それなら言つて直すようにしますから」

「いや、それも違つよ。本当に花実ちゃんたちにはなんの落ち度もないんだ。僕自身の問題で。花実ちゃんにはまだ理解するのが難しいと思つけど、いろいろもつと複雑なんだ。とにかくもう一度、これだけははっきり言つておくけど、花実ちゃんのせいでもお母さんのせいでもないんだ。花実ちゃんのお母さんは、誠実で勤勉で、一生懸命毎日を生きている。僕なんかにはもつたないくらいの人だよ」

「だつたらなんで、という言葉を飲み込んだ。「自分にはもつたないくらいの人で」というのが縁談を断る常套句だということぐらひは、私でも知っている。もし原因が私だつたとしても、本人を目の前に本当のことは言えないだろつ。唇を噛み締めつつむいた。」

「いい人だから、やめたんだよ。本当に」

風間さんの携帯が鳴り、「ちよつとごめんね」と出ていった。紙パックの残りのジュースを飲み干すと、ぬるくなつていて苦味が口に残つた。

「ごめんね、花実ちゃん。おじさん、これからちよつと行くところができちゃったんだ。送つてあげたいけど、自転車

なんだよね。大丈夫？ 一人で帰れるかな？」

風間さんがドアを開ける。

「え、あ、もつそれは大丈夫です」

「あ、そつだ。ちよつと待つてい」

風間さんは、倉庫のほうに行つてしまった。少しすると、店名の入ったレジ袋を提げて戻ってきた。

「これ、よかつたらお母さんと食べて」

ずしりと重みのあるそれは、ネットに包まれた大玉の桃四個だつた。西洋人の子供のほっぺみたいな、うっすらと桃色のそれはいかにもみずみずしくて美味しそつだつた。礼を言つて受け取ると、風間さんは駐輪場までついてきてくれた。

「ありがとうございます」

「気をつけてね。さよつならい」

お母さんが近づくと、言葉が、これだけ真実味を持つて響いたのは初めてかもしれない。

家が近づくと、自転車の前かごに入れた桃が重くなつてきたように感じた。どつしよつか、これ。風間さんは「お母さんと食べて」と言つたが、そんなことをしたら風間さんのところに行つたことがバレしてしまう。誰にも言えればいいか。私にこんな高級なものをくれる人はいない。果物なので、机の中にこっそり隠しておくわけにもいかない。冷蔵庫の中に入れておいたりしたら、すぐに見つかり、出処を追及されるだろつ。万引きでもしたかと思われたら厄介だ。くれるにしても、風間さん、もつ少し考えてくれればいいのに。お菓子なら、日もちして隠しやすいのに。など、高価なものをもらつておきながら、ちよつと恨みたくなる。

それにしても、と思ひ返す。花実ちゃんのことの原因じゃないよ、と風間さんは言つた。もしそれが本当だとしても、今後お母さんに、また同じような話があれば、私の存在はやっぱりネックになつてくるだろつ。私がお母さんの幸せを邪

魔ましているとしたら大変な問題だ。一体どうしたらいいんだろう。今の私にできることって。

なんとなく解決法が浮かんだ。でもそれには具体的にどうしたらいいか。私だけの知識では限界があった。

(鈴木るりか)『さよなら、田中さん』小学館

おばさん……アパートの大家さんで今回のお見合いの世話をした人。

木戸先生……花実の担任。

体にする……ようすにする。

詮無いこと……無意味なこと。

常套句……決まり文句。

問一 線部 (a) (b) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部 (X) 「ほくそ笑んで」とありますが、「ほくそ笑む」の使い方として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 我が家の犬と猫が仲良くしているようすを見て、いやされほくそ笑んだ。

イ 母親にうまく交渉してお小遣いを増やしてもらい、かげでほくそ笑んだ。

ウ 好きな俳優が近所で映画の撮影をしていたので、うれしさのあまりほくそ笑んだ。

エ 友人が運動会の徒競走で一位になったのを見て、泣きながらほくそ笑んだ。

オ 合唱コンクールで自分のクラスが思いがけず優勝し、みんなでほくそ笑んだ。

問三 A ~ D に入れるのにもっとも適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、選択肢は一度しか使えません。

ア スッコンと イ よれよれと ウ ポカんと エ ぐっと オ プカプカと

問四 線部 「心臓の血管が破裂しそうなくらいにドクンとした。」とありますが、これは花実のどのような様子を表していますか、説明しなさい。

問五 線部 「ほかに方法が思いつかなかった。」とありますが、何のための「方法」ですか。二十五字以内で説明しなさい。

問六 線部 「紙パックの残りのジュースを飲み干すと、ぬるくなっていて、苦味が口に残った。」とありますが、ここから読み取れる花実の心情はどのようなものだと考えられますか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 風間さんの話を聞くと、その気持ちも理解できるような気がして、自分がどうしたらいいのか分からずとまどっている。

イ 二人で話したことでますます風間さんはいい人だと感じて、母と再婚してくれないことをとても残念に思っている。

ウ 風間さんと話してきたが、結局子ども相手には本心を話してはくれないのだと、風間さんに対して失望している。

エ 風間さんは優しく接してくれたが、やはり自分の存在がじゃまなのだと思い、これからできることは何か考えている。

オ 風間さんは自分が伝えた気持ちを分かってくれたが、結果的に状況は変わらなかったののでつらい気持ちになっている。

問七 ——線部 「さようなら」という言葉が、これだけ真実味を持って響いた」とありますが、どのようなことですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「さようなら」という言葉を聞くと、これまでの風間さんの優しさがよけいに思い出された。

イ 「さようなら」はよく使う言葉だが、本当にもう風間さんには会えないのだと別れを強く実感した。

ウ 「さようなら」という言葉には、風間さんの本当の気持ちがおめられているのだとわかった。

エ 「さようなら」は友人同士では使わない言葉だが、大人が使うことでより本当の意味が感じられた。

オ 「さようなら」という言葉には、また会えるという意味がこめられていることが思い起こされた。

問八 風間さんと二人で会って別れた後の場面で、花実の心情がもっともよく表れている一文を本文中から抜き出し、初めの五字で答えなさい。

問九 この文章から読み取れる花実と母親との関係は、どのようなものですか。次の文を読み、正しいものは、正しくないものは×でそれぞれ答えなさい。

ア 二人とも相手のことを大切にしており、だからこそ自分の本心を何でも話すようなことをしないで、お互いに相手を思いやって生活している。

イ 花実は、食費にも困っていることを申し訳なさそうにする母親をみじめに思い、母親が経済的に苦労しないですむことを第一に考えている。

ウ お互いのことばかりを考えているせいで周囲のことに気持ちが行き届かないので、人を不愉快にさせたり、驚かせたりしてしまうことがある。

エ 理解しあって仲良くくくくしているように見えるが、実は相手の様子をつかっているので、どこかよそ

よそしく、心も行動もすれちがっている。

オ お互いがかけがえのない存在であり、花実は母親の幸せのためなら母親のもとをはなれてもよいと考え、母親は花実がいらない生活があるとは考えていない。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは今社会に出たばかりの人たちに向けてこの文章を書きたいと思う。

お年寄りが幸せに(a)くらせる社会ももちろん大切だけれども、若い人たちが希望とエネルギーに(b)ミちて生きている社会は素敵だ。若者が元気で幸せそうだと年長者だって幸せになるにきまつてる。

でも多くの人たちが「若い世代はたいへんだ」と言う。「人口減少社会だ」「日本の経済は右肩下がりだ」「ものすごい数のお年寄りの年金や福祉を少ない数の若者が支えていかなければならない」等々。でもその物言いに洗脳されてはダメだ。人口減少社会ということは、若い人たちへの需要は高くなる。ひとりひとりに大きな期待感が寄せられるということだ。だから胸を張って生きていってほしい。

しかし心配なこともある。君たちはそんなスターなのに、自分自身のことをそう思っていないのではないかということだ。

二〇一〇年に日本、韓国、中国、アメリカの高校生七千人に対して行われた意識調査のデータがある。現在二十四〜二十六歳くらいになっている人たちは。

「私は先生に優秀だと(c)ミトめられている」という問いに対して、「まったくそうだ」「まあそうだ」と肯定的に答えた高校生の割合は、韓国40%、中国55%、米国82%、日本18%だった。「親（保護者）は私が優秀だと思っている」は、韓64、中77、米91、日33。

では自分自身は自分をどう思っているんだろう。「自分が優秀だと思う」は韓47、中67、米88、日15。「私は価値のある人間だと思う」は韓75、中88、米89、日36だ。

最初にこの結果を見たとき、ぼくは心底びっくりした。それは二つの点だ。「私は価値のある人間だと思う」という問いに46%の学生が「あまりそうではない」と答え、17%の学生が「全然そうではない」と答えた。それはあまりに悲しい。何で君たちは自分をそんなに価値のない人間だと思っているのか？

そしてもうひとつは、「自分が優秀だと思う」という高校生が海外ではこんなに多いことだ。ぼくだって「あなたは優秀か？」と聞かれて、「まったくそうだ」なんて言える自信はない。でもアメリカの高校生の六割弱は「まったくそうだ」なのだ。

東アジアの三カ国とアメリカの間で差がつくというのが調査の予想だっただろう。しかし明らかに日本とそれ以外の三カ国の間に大きな差がある。

それは国民性であって、むしろ日本人の美質だという意見もあるだろう。「日本人は自分が優秀でないと自覚するからこそ、努力して自分を高めようとするのだ」「謙譲の美徳だ」と。でもそれは「かつての日本」では機能し、だからこそ両親も学校の先生も「お前はあまり優秀でない」と言ってきたのだけれど、これからの世界を担う若い人たちにとってそれがいいことだけだとはとても思えない。

そもそも何でアメリカでは九割の若者が「自分は優秀だ」と思えるのだろうか？
日本人から見るとアメリカ人の九割がハーバード大学にでも行ってるの？と聞きたくなくなってしまっ。

でもアメリカの家庭にホームステイしたりすればそれが分かる。親も先生もとにかく誉める。そして多面的に誉める。「この前の学芸会での詩の朗読を聞いて本当に感動したよ」「音痴のオレからこんなギターの天才が生まれるとは奇蹟だ！」「お年寄りのボランティアをしているあなたを見て、その心の優しさにお母さんはいつも感動しているのよ」

人間問わずここは優秀なところを持つているものだ。そして一つでも自分が優秀なところがあれば、私は優秀だと思う。日本人からするとかなりおめでたいような気もするけど、でもそうやって「自分は優秀だ」そして「自

分は価値がある」と思えるのも、とても大切なことだ。

それは君たちがこれからグローバル社会で、「自分を優秀だ」と思っている人たちと一緒に仕事をしていくこともあるけれど、それ以上にこれからの日本社会での「幸せ」に大きく関わってくるからだ。

(上田紀行「若い人たちへ」、「東京新聞」二〇一八年六月二四日朝刊)

国民性……性格や行動、生活などに関して、ある国民に共通してみられる特徴のこと。

美質……生まれつきもっている優れた性質。

美德……道徳の基準にあった性質や行為。

ハーバード大学……アメリカ最古の私立大学。

グローバル社会……国境をこえて地球規模で人々の営みが行われている社会。

問一——線部(a)～(c)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二——線部()、「右肩下がり」の語句の意味としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで悪い状態だったものがだんだん良くなっていくこと。
- イ 物事が好調であり年を追うことに良い方向に進むこと。
- ウ 今の状態を維持することができなくなってしまうこと。
- エ 事態や物事が今までで一番悪い状態になること。
- オ 後になるほどどんどん状態が悪くなっていくこと。

問三——線部「若い世代はたいへんだ」とありますが、これに対する筆者の考えとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人口が減っていたとしても、若い人たちには関係がないため、自分の思い通りに力を発揮するべきだ。
- イ 人口が減っているからこそ若い人たちの力が大切であり、自信とほこりをもって生きていくべきだ。
- ウ 人口減少を解決するためには、若い人たちが希望とエネルギーを持てるような社会にしていくなさるべきだ。
- エ 人口減少社会においては若い人たちが苦労するのは当然なのだから、心配せずに希望をもつべきだ。
- オ 人口減少社会における若い人たちの負担は大きい、それを乗りこえることで自信につながるべきだ。

問四——線部「最初にこの結果を見たとき、ぼくは心底びっくりした。」とありますが、筆者が驚いた二つのことを六十字以内でまとめて答えなさい。

